

【教員寄稿】

ポルトガル語との出会い、ポルトガル語を通じた出会い

齋藤 俊輔

こんにちは。2022年度から「アジアとポルトガル語圏」でポルトガル領インドに関する講義を受け持っている齋藤俊輔と申します。

ポルトガル領インドというのは、ポルトガルがかってインド亜大陸の西海岸にある現在のインド共和国ゴア州を中心として形成していた植民地です。私は、アジア史研究を出発点として、とくにポルトガル領インドの形成とポルトガル人のアジアでの活動について研究を深めてきました。研究のためには、おもに16・17世紀に書かれたポルトガル語の公文書や書籍を読み解く必要があります。言い換えれば、私は、歴史研究に必要なツールとしてポルトガル語を学び始めたのです。一方で、学生時代から在日ブラジル人コミュニティとの関わったことで、ポルトガル語は私にとってもっと身近な外国語となってきました。

本稿では、そうした私のポルトガル語の出会いとポルトガル語を通じた出会いについてすこしお話しできればと思います。

さて、私がポルトガル語を勉強しはじめたのは博士課程に進学してからでした。とても遅い出発です。私の指導教員であった故生田滋先生のご提案がきっかけでした。生田先生は、1960年代からアジア史研究を進めるために16・17世紀のポルトガル語文献を日本語に翻訳し紹介しただけなく、ヴァスコ・ダ・ガマ研究の第一人者としても知られていました。生田先生は、博士課程に入ったばかりの私にポルトガル語史料を使った研究をやってみてはどうかと提案してくださいました。そのときはわかりませんでした。生田先生は日本ではポルトガル領インドの研究がほとんど進んでいないことに気づいておられたようです。当時、研究テーマに迷っていた私はその提案を頼りに、ポルトガル語を学ぶことにしました。

生田先生はポルトガル語の基礎文法を手ほどきくださり、そののちポルトガル語で書かれた史料を読むトレーニングを始めてくださいました。トレーニングは、毎週課題して出されたポルトガル文献の日本語逐語訳を私が作り、先生と一文一文とチェックするという方法で進められました。トレーニングは、現代ポルトガル語の論文からはじまって、16・17世紀の書物へと発展して、数年にわたって続きました。

なかでも、印象深いのは、16、17世紀にアジアで活躍したポルトガル人の歴史家ディオゴ・ド・コウト（1542年～1616年）が書いた『老練なる兵士 Soldado Prático』という作品の講読です。『老練なる兵士』は、ギリシャ・ローマの格言をちりばめた銜学的な文章で、この分野に通じた生田先生も首をひねるほどでした。しかしながら、同書を読み進めるうちに、最初は生田先生に日本語訳の間違いを指摘されてばかりだったのが、次第に自分の意見も言えるようになっていきました。そして、最後は先生が「次の研究会はいつにしましょう」とおっしゃってくださるほどになりました。授業ではなく、研究会に格上げになったことは、自分の成長を感じられる瞬間でした。

もっとも、そのようにポルトガル語の史料が読めるようになるまでにはだいぶ時間がかかります。私は、生田先生との授業に並行して、ポルトガル語を学べる場所を探しました。都内でも語学学校に体験

入学したりしましたが、最終的に住まいから近い群馬県邑楽郡大泉町でポルトガル語を学べる場所を見つけました。日伯学園というブラジル人学校です。

大泉町は、外国人比率が20パーセントを超え、なかでもブラジル人が多く定住していることで知られています(2024年現在)。日伯学園は、同町や近隣地域に居住するブラジル国籍のこどもたちがブラジルの教育を受けられる教育機関として、2000年代初期から活動を続けている一方で、日本人向けのポルトガル語コースも運営していました。同校で、私はブラジル人教師からポルトガル語を学ぶことができました。

ところが、同校でポルトガル語を学びはじめて2年ほど経ったある日、突然日本人向けコースが閉鎖されることになりました。私はこれで日伯学園でポルトガル語を学ぶ機会が失われるものと考えていましたが、そうではありませんでした。閉鎖のお知らせと同時に、同校の経営者から日伯学園で働かないかと誘いを受けたからです。そこで、私は、大学院に籍を残したまま、日伯学園で働くことにしました。

仕事は、日本語をブラジル人のこどもたちに教えることです。当時はまだ児童日本語教育もはじまったばかりでしたし、私も日本語教師の訓練を受けたことがありませんでしたので、なかなかよい授業がつかれませんでした。そして、なにより最初はこどもたちとのコミュニケーションに苦労しました。そもそも史料講読のためにポルトガル語を学んでいただけなので、会話力を軽視していたためです。

しかし、こどもたちは私にとってもっともよいポルトガル語教師になってくれました。こどもたちとの会話は、教科書や語学学校では学ばない俗っぽい表現や俗語などを知るきっかけになりましたし、なんとといってもポルトガル語のリズムを体感する機会に恵まれたからです。ポルトガル語のリズムを知ったことで、一見関係のないと思われる近世のポルトガル語史料が読みやすくなったのです。

その後、私は、生田先生との研究会や日伯学園での授業をつづけながら、ポルトガル領インドに関連するテーマで博士論文を提出しました。ようやく、ポルトガル語史料を用いて、歴史の論文を書くという目的がなんとか達成できるようになったわけです。

さて、今回この **Escada** への寄稿文の作成を通じて、私は、今日までポルトガル語を学び続けられたことが偶然の出会いのおかげだと感じるようになりました。

ポルトガル語を学び始めたころは、恩師があれほど熱心にポルトガル語の史料を読むトレーニングを施してくださると夢にも思いませんでしたし、日伯学園でブラジル人のこどもたちからポルトガル語を学ぶなどとは想像もできませんでした。もちろん、歴史を研究したいという気持ちがずっと続いていたことは確かですが、それでも偶然の出会いがあったからこそ、ポルトガル語の学習が続けられていたように思います。

最初に書いたように、今、私にはポルトガル領インドについてポルトガル語学科の学生の皆さんにお話しする機会が与えられています。この機会が私にとってよき出会いとなることは間違いありませんが、学生の皆さんにとってもそうなるよう努力していきたいと思っています。学生の皆さんとはいずれ授業でお会いできることを楽しみにしております。ともにポルトガル語やポルトガル語圏について学んでいきましょう。